

東京藝術大学 130 周年記念事業

全国美術・教育リサーチプロジェクトラウンドテーブル 「美術」において育成すべき資質・能力とは？ —東京藝術大学教員と幼・小・中・高の教員による 公開ディスカッション—

【開催日】11月18日（土）14:00 - 16:00

【会場】東京藝術大学美術館 3F 展覧会会場内



〈テーマ I 学習指導要領の変化について〉

【パネリスト】

齋藤典彦（東京藝術大学美術学部絵画科日本画教授）
OJUN（東京藝術大学美術学部絵画科油画・GAP 教授）
森淳一（東京藝術大学美術学部彫刻科准教授）
上原利丸（東京藝術大学美術学部工芸科准教授）
山崎宣由（東京藝術大学美術学部デザイン科准教授）
森純平（東京藝術大学美術学部建築科助教）
小沢剛（東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授）
本郷寛（東京藝術大学美術学部美術教育教授）
荒井経（東京藝術大学美術研究科文化財保存学准教授）

糸原淳子（荒川区立南千住第二幼稚園園長）

平田耕介（新宿区立愛日小学校教諭）

江原正（小田原市立千代中学校、鴨宮中学校非常勤講師）

風間正幸（全国高等学校美術工芸教育研究会理事長、船橋高等学校教諭）

奥村高明（聖徳大学 児童学部 児童学科教授）

伊藤達矢（東京藝術大学美術学部アート・コミュニティ形成事業とびらプロジェクト特任准教授）

【進行】

中村政人（東京藝術大学美術学部絵画科油画教授）

学校教育法に基づき国が定める教育課程の基である学習指導要領等には育成すべき資質・能力が以下のような三つの柱で書かれている。

- 1) 「何を知っているか、何ができるか
（個別の知識・技能）」
- 2) 「知っていること・できることをどう使うか
（思考力・判断力・表現力等）」
- 3) 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
（学びに向かう力、人間性等）」

本ラウンドテーブルは、「美術」という教科において、この三つの柱をいかに考えるかを中心に議論していく。

中村：最初は文部科学省の中央教育審議会の中での変化として、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめから一部を抜粋しました。「『ゆとり』か『詰め込み』かの二項対立を乗り越え、いわゆる学力の三要素、すなわち学校教育法第30条第2項6に示された『基礎的な知識及び技能』、『これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力』及び『主体的に学習に取り組む態度』から構成される『確かな学力』のバランスのとれた育成が重視されることとなった。』とありますが、これは別に美術だけではなく、大きな括りの中で三つの柱を出してきているのだと思うのです。この指導要領の中で変化した要素について奥村先生に教えていただけますか。

奥村：図工、美術が先取りしていたんです。図工、美術が昔から言ってきたことがようやく全体に広がったと考えた方がいい。図工、美術がやってきたことは、絵を描く、物を作るということも大事ですが、それを通して人間としての力や哲学などを育ててきました。そこによりやく他の教科も、国際的にもそのような傾向になってきたと考えられます。

中村：今のお話を受けて、本郷先生のお考えを教えてくださいませんか。

本郷：以前奥村先生と同時期に中央教育審議会にでていたのですが、その頃の議論に比べればかなり変わってきたと感じますね。まさに奥村先生が言われるような美術がようやく、いろんな学校教育のなかで整ってきていると思います。

中村：美術では、先ほどのゆとり詰め込みのさらに先の議論が既にされていたということでしょうか。

本郷：はいそうです。問題があったからその都度 10 年に一度改訂の議論があった。10 年に一度だけではなく何年かを通してずっと議論していくわけですが、その中で学校教育全体の方向みたいなのが、奥村先生流に言えば芸術が作ってきた考え方が他の教科にも浸透してきている。枠としてバランスがとれた指導要領なのかなと思っています。

中村：美術の教科で議論していることがこのように変化してきたということに関して、中学校の先生を長くされている江原さんのご意見を伺ってもよろしいですか？

江原：学力を考える場合、なぜ学ぶのかというのをきちんと考えなくてはならないと思います。学校の枠の中では、教師は直後の結果を生徒に求めたがる。それも良いと思うのですが、でも生徒はその後どのように生きていくのかということ学んでいると思うのです。時々生徒にかける言葉なんです、「あなたの人生の主人公は誰なの？」。自分自身だと当然答えますよね。だから自分のために勉強するのだと自然と出てくる。100 点とったとかはもちろん良いのですが、そういう部分だけではないことももっと伝えてゆかなければならない。美術においてももちろんそうです。

中村：そうですね。思考力・判断力・表現力と 3 つ並んでいるということからも、この表現力ということについて高校の立場から風間先生はどのようにお考えでしょうか？

風間：学習指導要領で言っていることは、元々美術工芸でやっていることだと思います。ちょっと読み上げますが、「数値で測り難い感性・表現力・情操等の育成が最も得意とする力であること。それから数多くのすぐれた芸術作品と出会い様々な芸術表現、創作活動を行い、五感を使って表現を行い人格形成に大変大きな影響を与える力であること。そしてこれらのことが多様な価値観の育成に繋がり、精神的な豊かさを発見できる力であること。」となんだか難しいですが、簡単に言うと数値で測れない力、抽象的な思考を唯一教えられる教科は美術ではないかと思います。近年、スマートフォンとか AI とかが出てきてどうなるのかという話があります。ビッグデータとか AI というのは知識の塊なわけですね。だから、先程から話が出ている本当の学力とはなんだということを改めて考える機会を美術は与えていると思うのです。そこに想像力というものを持って唯一臨めるのは美術工芸教育ではないかなと思います。

中村：ありがとうございます。美術工芸で考えていたことが現場を含め先に行っていて、その部分が制度設計の中に言語化されてきた。全体的な今の変化、「ゆとり」「詰め込み」からの変化について森さんはどうお考えですか？

森淳一：今の風間先生の発言を聞いていて、現場の危機感というか抽象的なものへの理解、どういう風に世界を捉えていくかというというのは美術が機能しやすい教科のように思えました。抽象的な力というのは言い換えると答えのないことに対して深く考えるということだろうと思います。生き方だとか世界の捉え方を多面的に考えていく力を養うための美術の機能がそこに出てきて、他の教科よりも取り組みとして先行したというのは理解しやすいと感じました。



〈テーマ 2 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）〉

中村：学習指導要領の中で育成すべき資質・能力の 3 つのうちに出てきている一つめは知識・技能ですが、僕らが美術というものを作る、または指導する中でその役割をどの様に果たすべきか、齋藤先生は日本画という立場からも含め、どうお考えでしょうか。

齋藤：特に美術においては、物を作る、物に触れる、そこからそれぞれが得てきたものが、知識になり、次につながる技能になっていく。それは決して、すでにある知識や言語や哲学だけではないのだと思います。

中村：先ほどの AI のお話もあり、ビッグデータの活用等は第四次産業と言われていて教育の現場に影響を与えています。ビッグデータの中で処理した知識等が目の前にすぐ活用できる世界になっています。デザインの分野でも社会に対しての関係は複雑になっていると思うのですが、山崎さんは知識、技能という点でデザインの分野の

中でどのような教育的な立ち位置を大事にしていますか？

山崎：デザインの場合は、日本画や工芸のようにひとつ優れたところを追求する形より、いろいろな知を得て、それを掛け算して新しい違ったものを作っていくということをかなり昔からやっています。やはり知識というのは非常に重要で、ビッグデータはプラスになる。ただ、知ってることと考えることは別で、データの活用だけに偏ると考えることがなくなってしまうか。例えば、掛け算を実際やってみれば、 -1×-1 が1になるという極端な変化に気づくことができるわけです。良くないものが良いものになる可能性に気づく。データや知識は知ってるもの同士をかけ算できるかどうかという気づきや可能性を追求する心などに刺激を与えるものになればと思います。

中村：工芸の場合非常に技術的にも歴史的に深いところから継承してきている部分もあり、当然そこには知識も含まれています。上原先生は知識・技能についてどのようにお考えですか？

上原：工芸の場合は技術と技法、またそれに伴う知識も必要で、素材のいろんなことを知るのとは基本になっています。特に知識や技術を駆使して制作する上での問題を解決していく能力は自分で獲得しなくてははいけません。自分が感じないかぎりは教えるに難しい。特に表現になると、教え込もうとするとある方向性に偏ってしまう。だから幅広い表現ができるように、自分で得たいいろいろな知識や技術を一回消化して、社会との関係性と組み合わせながらどうやってものを作っていくかを大学の中では考えてもらっています。何を知っているかというより何を感じているかということがとても大事で、そこから表現は繋がっていると思うのです。

桑原：今、上原先生が、何を知っているかよりも何を感じているかが大事とおっしゃって、本当にそうだなと思います。幼児教育も感じることをとても大切にしています。今回の教育要領の改訂で、幼児教育においては方向性が大きく変わったとは捉えていません。「主体的、対話的で深い学び」は今まで、幼児教育が非常に大事にしてきたことですが、本当に学びが深まっているかどうかは、もっと掘り下げ考えていく必要があると思っています。「個別の知識・技能」では、豊かな体験を通じて感じたり気づいたり分かったりできるようになったりすることが非常に大事にされています。ですからひとつひとつが個別にあるとか順番に進んで行くということではな

く、循環的であったり相互に絡み合ったりしていると思います。子どもたちが日々の生活の中でどんな体験をし、何に心を動かされたのか。その感動を表現したいという思いの高まりの中で、表現の幅を広げていくことが大切なのだと思います。小学校にはそれがどうつながっていくでしょうか。



〈テーマ3 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）〉

平田：図工は元々「思考力・判断力・表現力」を使わなければ作品というかものを作り出すことができないので、そこをどういう風に子供の主体性を引き出して授業を組み立てていくかということが図工の教員には課せられています。図工は専科の先生ではなく、全国でほとんど担任の先生が図工をやっています。自画像の描き方を教えてくださいというテーマの研修で講師として呼ばれたりします。でも、私はあえて描き方などは教えたりはしません。自画像をどうして描くのか、また子供が描きたいと思う主体性、必然性みたいなものを授業を組み立てる時に先生が考えなければ子供が自画像を描く意味がないからです。ただ、ある県では、たくさんの担任の先生が図工美術を研究したいと集まっておられたのですが、県の展覧会で優秀賞を前に置いて、賞を取るためにはこういう絵をかくんだよという授業が行われていました。最近はそういう流れを変えようという話を研究発表ではしています。特に今すごく大事に思っていることは、他者が作っているものを受け入れられる寛容性みたいなものが子供達に育っていくことです。そのことを、これから図工専科をやる先生とか図工の教育を考えている方とかに伝えていけたらと思っています。

江原：学習指導要領でもわかるように表現と鑑賞は2本立てなんですね。そこに価値を両方とも見出しましょう、新しく価値を作りましょうと書いてあります。そこをきちんと押さえていないと表現だけの話になってしまうと思います。

中村：鑑賞というバランスとの2本立てでいくということでしょうか？伊藤さんにも伺ってみたいと思います。

伊藤：僕も授業で美術館に鑑賞にくる子供達を受け入れて美術館で授業を展開しています。鑑賞と、いわゆる造形というのは列々のものの様ですが、一人の人間の中では相互に作用するものであると思います。ものを作る上では先ほどお話に出ていたように、まずどう感じたのかという受信する力、つまり鑑賞する力が非常に重要だと思います。今回展示されている幼稚園から高校生の作品を見て、どれも作っている間すごい楽しかったろうなと感じる作品がたくさんありました。きっと作りながら受信していったんだと思うのです。作品を作るという行為は、作っている最中に変化する画面やものから、自分が何かを受け取って、それと呼吸を合わせながら、作品は出来上がっていくと思います。だから、受信力つまり鑑賞するということがものを作ることの基本になっていくのだと思います。

OJUN：今回広く全国から集められた作品は限られた一部でしかないわけで、1枚の絵の隣に選ばれなかった作品というのは必ずあるわけです。自分が描いた絵の隣に描けなかった描かれなかった絵が必ずあるのだということ。つまりなかったものを思い起こす想像力が必要なのだと思います。だから学生には描いた絵の隣にはお前が描かなかった絵があるんだよということを話します。これは一昨年にお亡くなりになった文化人類学の西江雅之さんの受け売りでして。ある時に喫茶店で話をしていたら、たまたま客が席を立てってしまった椅子があったんです。「これはなんですか。」といきなり言われたので、「椅子ですよ。」と言ったら「そりゃあ椅子なんだけれども、それはどういうことなのかわかりますか？」と言われました。この人は何を言ってるのかと思ったのですが「ここに椅子がある、ということは、椅子じゃないものが他にたくさんあるということなのです。」と言われて、世界ってのはそういう捉え方もできるんだと思いました。「多様である」と。それから、無いものをどう見るのかや、どう想像するのかについていつも自問する様になりました。またそう思うとたとえば、子どもたちは子どもたちの方が見えないものが見えたりとか、感じられたりするのかもしれないと感じました。

中村：荒井先生、想像力という点において、保存修復の立場からはいかがですか？

荒井：自由に表現したい、自由な表現をキープしたいということのためには、やはり世の中にどういう表現があり、過去の人間によってどう行われたのかを知ることが必要だと思います。つまり、固定観念をいかに取り払うか、こんなことやっても良いんだということを知ってるか知らないかで決まってくるところがある。名品を見てそれについての知識を学ばせるような鑑賞教育では仕方ないと思いますが、より自由な表現のための鑑賞教育というのは必要だろうと思いますね。

風間：私の日々の現場の感想ですが、生徒達の実体験が少ないように感じます。山の中に入って行って汚くなるとか昔なら当たり前の体験が確実になくなっている。それは、工芸でもものを作らせる時に生徒達を見ていると分かります。例えば針金を僕がペンチで切ってやったら「先生、ペンチって針金が切れるんですね。」って言うんですよ。それはちょっと極端な例ですが、そういうことが多いです。あと、椅子とか作らせると上に天板があって脚を立ててできませんでしたとか言うてる。学力的にはけっこうある学校なのですが「それでおかしいと思わないの？」と言っても「そうですね。」なんて感じます。私たちからすると気づいてよって思いますと言わないと気づかない。

中村：今の発言に対してどうでしょう。体験が不足しているのではと。逆に不足している部分と新しく体験している部分があって。うちの子19歳なのですがずっとYoutube見るんですよ。教科書を見て勉強するのと、同等かそれ以上くらいにYoutubeを見ていろいろ学んで知識を得ていると聞いたのですが？第四次産業的なコンピューター以降のものに心が奪われて、僕らが全く知らないことが起こっている感覚があるのですが。

平田：実際うちの学校に1クラス分のタブレットがあっていろいろな授業で、活用しています。この前授業でこんなことがありました。よく描きたいものが思いつかない時に、インターネットで検索して参考にします。想像して描く絵の授業である児童が惑星を描こうとしていたのですが、ちょっと面倒くさくなって、これでいいですよと言ってきました。で、もっと調べたら描けるよと私がタブレットで調べてみせると、描きたいと思っていた画像がバンと出てきました。でも、彼は逆にこれまで描いてたものと、描きたいと思っていたものが違うとはっきりと分かってしまって、しょうがなく検索されたものを見てちょっとだけ手を入れていたということがありまし

た。私はその時に良いことなのか申し訳ないことなのか、すごく悩みました。その辺から思考力・判断力や表現力と、どうこれから子供達が向き合っていくのかというのが課題かと思いました。

森純平：今この議論の後ろに作品があるように、人と人との間に作品があることが一番重要だと思っています。先ほどの風間先生のお話にもありましたが、椅子を作ることによって気づきを与えられた。そこにこそ本当の美術の価値があるのだと思っています。



〈テーマ4 どのように社会と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)〉

中村：次の3つめは生きる力という最終的には大きな括りになり、話が複雑になりそうですが、本郷先生のお考えをお聞かせ願えますか？

本郷：学生達に指導する時に、美術は私たちの中で何であるかを、自分なりにしっかりと意識を持つこと、などについて議論しています。美術の大きな括りに文化という概念があり、じゃあ美術とは何かと言った時に、美術はもともとあったものではなく、人間が作ってきたもの、そういう文化だということが基本にあるわけです。それが人間が生きることと繋がらないような美術だったとしたら、これはやっぱりおかしいよねと。ある学生が言った「生きてくことと直接繋がっていく、将来、一生。それが人間が作ってきた所以のひとつの美術のあり方じゃないか」というのが印象的でした。美術が文化の中にあるという意識が抜けて、表現であればなんでも良いんだ、ということでは成り立たないのではないかという話をしました。今、多様化する中で、例えば藝大の学生達がどう美術を理解しているのかは個人々人違いますよね。それと同時に、高校生、中学生、小学生にとっても、美術や文化への理解は重要です。だから教育の現場だけでなく、表現者側も、教育に対する大きなしっかりした考え方を、

これからはもっと持たなければいけない、そういう制作者達ももっと生まれてこないといけないという議論を学生たちとしたことがあります。

江原：伝統文化は継承、発展していく必要性はあるのですが、10年20年経つと職業って当然変わってくるわけですね。今まで人間がしてきたことがなくなる可能性もあります。美術の学びってというのはないものから新しいものを作り出すところがありますよね。だから自分が生きて行くためにはどうすればいいのかっていうのを自分で作り出していくのに繋がると思っています。

小沢：ゼロからものは作れないですが、概念的にはすごく正しいと思っています。テロップを読み返しましたが、普段学生に自分が語ってるのと全く同じで良い言葉だなあと。

中村：小沢先生は、韓国中国の作家、日本の作家小沢先生の3人でユニットを組んで国際展も含めいろんなメッセージを作っているじゃないですか。いかに美術を通じて社会、世界と関わるのかという3国の視点から作品を発表していると感じますが。

小沢：そうですね。現実の社会では政治家とか経済界の人たちとかが超えられないものでも、美術という方法論でいろんなものが飛び越えられる。そのことを僕は信じていて、それを語りながら作品を作っていくのがとても重要だと思います。

奥村：教育って長く知識技能を詰め込んできた。そして反動で「ゆとり」になった。でもどっちもだめだったんです。所詮「教科」を教えてたんです。教科の学力の方を。もう今単純な数学なら新興国に勝てないですね。今出たようにグローバルとかAIで立ち行かなくなってます。教科を超えて、学力を想定する時代になった。どんな学力かということ、議論にあったような単純な知識じゃない。その知識とは使える知識です。そして技能は創造的な技能です。子供自身が感じ考える、主体的学びであり、想像力とか感性を持って世界を捉え、生きることと直接つながることなんです。なので芸術が昔から言ってきたことが、ようやく今できてきましたよと、実は一番最初に申し上げた次第です。

中村：良い状況になっているということですね。ここで、どのように社会、世界と関わりよりよい人生を送るか、デザインからの考えをお聞きしてみようと思います。

山崎：デザインも3つあって美術的デザイン、工学的なデザイン、あとビジネス的なデザイン。デザインの領域も最初美術から始まり、だんだん工学が混ざって、最近ビジネスのデザインがという話になった。本当に3つなければいけないんです。今の美術のお話でもそうで、知識は時間が経ち文化が進むとその幅も広がって、そのどれも重要なこととして受け継がれ、蓄えられてきたと思います。美術には、非常に有用な学ぶ力、また、個人の志向性とか表現力などに直接した考え方が蓄えられています。デザインの業界も企業でも創造性のある人間がないと世界に立ち行かなくなると言われています。

中村：デザインの場合は非常に有用性と言いますか、実効性が強い感じがしますが美術という言葉の中に職業的なものとの結びつきがすごく弱い感じもします。ある方から質問を受けた時に、「美術っていうのは職業と結びつきませんよね。職業として結びつくならば、子供たちが画家になるとかアーティストになると言っても、その職能が何か明快に分かると思うんですが、非常に幅広いので掴みにくいんです。」と言われたんです。職業的に美術というのはどのように社会、世界と関われるのでしょうか？

荒井：特に学校の中で美術のことを考える時に体育を例に考えたら良いと思います。体育とかスポーツっていうのは世の中に普及していて、それによって身体的精神的にすごく良い影響があるのが当たり前になっています。官庁の組織ですらスポーツの方がちょっと先を行くほどの状況で、それは一体どこから生み出されているかと考えると、体育科の授業だけではないだろうと。例えば運動部が10個くらいチャンネルがあるのに、美術部は1個しかないわけです。課外活動面でサッカーを経験した者や水泳を経験した者がいるなど、相当な人数がスポーツを経験していますが、それに比べて、美術を経験する機会というのは極めて少ない。今の中村先生のご質問に戻りますと、美術科という教科は職業に役立つのかという質問はややナンセンスで、スポーツが職業に直結してないのと同じ。世の中に強い影響を与えているという視点から考えるべきかと。

[中村：ただ、かたやプロ野球選手になるとか、ワールドカップのサッカー選手になる、オリンピック競技に出ている選手になるなど、毎日テレビをつけると必ずスポーツのニュースが流れていて、でも、アートのニュースはほぼない。僕が昔画家になりたいと言うとうちのお

袋の場合は「おまえなにぶざけてんの？」というように言われたわけです。それでもなりたいとこっそり思っていて、進学する時などは担任の先生には「お前どこの学校受けるんだよ」「藝大、、、」「藝大??じゃあ、僕は無理だからお前一人でやれ」て言われました。このような流れは今まだ続いている感じがするんですね。



〈テーマ5 幼稚園、小、中高等学校、大学の教育的流れをどのように作り出していくべきか?〉

中村：僕の場合は小学校、中学校、高校の先生が非常に素晴らしく、この3人の組み合わせから僕のいた高校では3年連続で藝大に受かったんです。でもその組み合わせが崩れた途端に、誰も合格、受験すらすることがなくなってしまった。今思うと奇跡の3人の先生の流れがあった。それぞれ非常に特徴的な授業をしてくださりました。この流れについて議論したいのですが、もう一度条原先生から順番に行きましょうか。幼稚園から小学校、そのような流れの中で考えた時にどうでしょうか？

条原：幼児期と言う人生の始まりの時期に、共に生活する友達や自分の気持ちを受け止めてくれる先生、本気で向き合ってくれる大人など、そういう人との関わりの中で、自分は大事にされている、生きることはよいものだと感じてほしい。また、思い通りにならない自然との関わりの中から、美しいものへの感性とか、不思議さとか、いろいろなことを感じ取って、表現してほしいと思っています。子どもの心は見えないけれど、その子が感じていることは何だろう、共感したいと思いながら子どもと関わっています。

平田：学習指導要領には「見たことから、感じたことから、想像したことから、伝え合いたいことから」という文言があって、その中から何を主とした授業にするかを考えてください、ということが書いてあります。ですから、「見たことから」描く授業では自画像でも木を見て

も良い。「感じたことから」では、絵の具をぐじゃぐじゃと触って絵を描き初めて粘土でも良いというようになっています。その学習指導要領が言っている事を押さえていけば、教科書は使わなくても良いようになっています。そこから子供が何を考えてどういうことを判断して表現していくのかを大事にして授業をしています。図工美術を通して、これまでにない固定概念を崩すような新しいものを出して良いんだと、自分の正しいを作って良いんだよということを、実体験を通して卒業していけるような小学生をつくれると良いなあと思っております。

中村：幼稚園から小中学校へとバトンタッチをするわけですが、その中で受け止めて送り出す部分に関しては何かありますか？

平田：教えなければいけないこともあって、版に表すということは指導要領にも載っていて、彫刻刀を使って木を彫ったりとか、釘や玄能を使って木工をしたりとか電気系のこぎりを使ったりとかはきっちり教えて、中学校に送り出すようにしています。でも理想としては、6年生になったらもう自分の作りたいものをいろいろな道具や材料を自分で決めて作れるようになる姿を見ながら、卒業を迎えられると良いと考えています。

江原：定年する前に勤務していた学校で、幼稚園、小学校、中学校、私立の高等学校も含めて合同の展示会を数年間行いました。これは一緒の場所ではなく、商店街さんをお願いして展示をしていただきました。実はこれ、奥村先生が関わられたところを見学に行って良いなあと思って開きました。

中村：なるほど。そうすると学校に加え地域での流れも作り出す試みもあるんですね。

風間：高等学校は一番大学とか社会に近いところにいるのですが、一人でも美術工芸のファンを送り出したいと思っています。ただ、なかなか難しい、関東地方のある県で陶芸の先生が退職をして、「もう俺がやめたらこの県で陶芸教えるやついないんだよな。」という話をしました。結局その県は高校生が陶芸に触れる機会がなくなったわけです。美術も似たことがあると思うんです。すごく苦勞して絵を描いたり作品を作る生徒の数はちょっと少ないように私は感じています。

奥村：皆さんがおっしゃっているのは、おそらく自分の正しいを作り出すとか価値や意味を作り出すことが大事

だということかと。つまり芸術というのが最強の学問というか、学習のコアになるという認識が大事だろうということですね。今日の会場では、子供の作品が大人の作品と対等に展示されているんですよ。これたぶんかなり異例です。鑑賞者が年齢に関係なく、どれも創造的な作品として見れたかどうかが問われる展示ですね。

中村：高校から大学へいかに流れを作っていくかということ考えた場合に、齋藤先生はどのようにお考えですか？

齋藤：個人的な思いになってしまいますが、この学習指導要領で求められる立派な人になれなくてこっちの方に逃げてきた、そういう引け目みたいなものが美術を選ぶ人にある気がするんですよ。お金儲からないかもしれないけども、心豊かに生きていけたらそれはそれで良い人生だと。言語化できない、論理化できないことでも自分の作品の中ではそれなりに論理立てていたりとか、いわゆる一般的にちゃんとしていますということではない生き方もできるんだよということを、作品あるいは、地元との結びつきとかの中でフィードバックできればいいのかなと思います。

中村：油画の入試は再来年から面接を導入します。つまり、この流れの中で今までは本当に実技を重視しましたが、これからはどういう人がこの絵を描いたんだろうと面接を導入するんです。受験という非常に厳しいものが毎年僕らの前にありますが、そこも含めて高校大学の接続の部分、そこを OJUN さんなりにどうお考えでしょうか。

OJUN：今までの入試では出題された内容に沿ってを制作する。それを答案として判断、判定してきたわけです。でも最近よく感じるのは現役入学の学生が多くなってきたということ。僕らの頃は浪人が多く現役合格は本当に10分の1に満たないくらいだった。だからこの間まで高校生だった生徒がいきなり藝大で1人2人しかいないと最初はなかなか大変なんです。でも今はある程度数が増えていて、いろいろと悩みや問題などをお互い話し合ったりしている。随分受験生の状況も変わってきた。だから僕らも入試でただ出題したものの回答だけを見るのではなく、どういう受験生がこの作品を描いたのかと、例えば顔を見るだけでも、あるいは一言二言単純な質問に本人の口から答えてもらうだけでも違うだろうと。もう少し作品だけではなくて、作り出した人の姿、声、そういうものも是非みていきたいなと思ってるんですね。

中村：はい。2020年センター試験廃止後の様々な高大接続というの、美術だけではなくていろいろ言われていますね。森先生、何か新しいアイデアや意見はありますか？

森淳一：今回のこの企画に付いてもそうですが、第1回目だったので、あるフィルターが掛ったものたちがここにあると思います。だからそうではなく、評価の基準から漏れてしまったようなものを、どう僕らが再評価して紐解いて関係を持っていくかということが、今後の課題のひとつでもあるのかなと思いました。

上原：先程、荒井先生からあったスポーツの例なんですけれど、やはりスポーツは健康とか食とかすごくいろんなところと結びついている。そういう受け皿を増やしていくこと含め、美術もいろんな文化的な繋がりを持たないといけない。つまり美術の専門家になる人は少数かもしれませんが、美術館に足を運ぶとか、いろんな学校の取り組みに参加するとか、その支援をするとか、そういう人材を含めて美術の教育であれば良いと思っています。

山崎：バトンのように順々に渡す、それは進んできた様に思います。先程、現役受験生の多くが入るという話も出ましたが、なかなか優秀だなど。力量は経験値と比例なので、まだまだというのはあると思いますが、いろんな知識も経験も進んできた証拠なのかと。では、さらにこれからどうするのかです。例えば上の子たちが下の子たちに教える、そういう流れがあると非常に勉強になるかと思いました。小学校は幼稚園の子達に、中学校は小学校の子達になんて風にやると、その子達の感性も磨かれるし、何かしてあげようという、社会的な意味合いも増えます、また下の子達をみて学ぶべきことや、たくさん影響を受けることもありました。

中村：実際アクティブラーニングの現場では、先生たちが授業を学生に委ねて作っていくというのも随分進んできたように感じます。

小沢：逆に、小中高の美術がなくなったら、一体どんなことが日本に起こるんだろうと。ブラジル人の友人の話ですが「え、日本に音楽っていう教科があるの？」てびっくりしてました。ブラジルはいろんなパリエーションのオリジナルの音楽が町中に溢れている素晴らしい国です。家庭の中でも弦楽四重奏をやったり、どの家でも絶対楽器があって、家庭でコンサートが行われる。そんな状況だから音楽教育はいらないと、彼はそ

う結論づけていました。日本でも、そんな風に家庭の中から地域の中から、美術を教え合うとか自然に生まれてたら良いのかな。

中村：町自体がそれだけ成熟しているならば、ブラジルのようにあえて教科にしなくても、すでに音楽の楽しみ方が社会で成り立っている。逆に言うと成り立っているならば、その部分はもっと他の考え方もできるということですよ。

森純平：建築科の場合は、まず入学した初日に大体教授達から「僕たちのことを先生と呼ぶな。常に、さんづけで呼んでくれ。今までの学校教育は誰かから学ぶことがあっただろうが、藝大に入ったからには君たちは僕たちのライバルなので、建築家として、常に日頃から活動して建築家として何かをしなさい。」と言われます。それで大体学生はみんな襟を正し、自分達が今学んでいることをどう社会に繋るか、どうやって建築家になるかを考えるようになるんです。美術の場合でも、今まで話されていた小学校から中学校の流れの中で、美術が持っている「繋がる可能性」みたいなものの価値がもっと見えて来ると、そこに関わる人たちの態度も変わってくるという気がします。

中村：伊藤さん、実際に実践している立場だと思うので、具体的に教育の流れを作るといった場合、何かアイデアはないでしょうか？

伊藤：やはり美術の持っている価値や可能性というものが、社会に対してこれからどう必要とされるかについて、考えたり対話したりする場を増やすしかないと思います。いわゆる「ゆとり」と「詰め込み」を超えた教育のあり方に象徴されるように、そこに隠れている問題は決して美術だけの問題ではなく、全ての人間の成長に関わる大きな問があると思います。そして美術という教科があるからこそ、そうした問を語れる場が豊かになるのだと思います。どれだけ多くの人たちが、どれだけ多く語ったのか、その結果が奥村先生が一番最初におっしゃったような行動の後に文言がついてくるという状況を生むのだと思います。だから最初に紹介された文言は、まさに先人たちが、美術について多くの言葉を交わし行動してきた現れだとすれば、我々はさらにもう一歩先のアクションを起こさなくてはならないと思いました。

荒井：先程の小沢先生の話とは角度は違いますが、今義

務教育の中とか、高校の教育の中に図工とか美術が存在しているのは、先人の誰かが苦勞してそこに一枠設けたということなので、それを全国民が通過しているという事実はひとつの財産だろうと。そこで前々から考えているのは、例えば小中学校では卒業生の作家の作品をアーカイブをして、子供たちが自分の先輩が作った本物の作品を見る機会を作る。それを通して自分の将来像をイメージするなど、小さい循環を作って、根っこを生やすべきではと。作家ももちろん美術のマーケットに出たり、大きな世界的な美術館に作品がアーカイブされることもステータスだけど、まずは自分の母校にアーカイブされ、逆に世界的なギャラリストとかキュレーターが、その作家を調べるために田舎の小学校に行くということも妄想したりしています。

本郷：今日は各科の先生方に来ていただいているところですが、これは藝大のために開いているわけではないと、聞いてくださった方々に誤解されないようにしたいなと思います。今日の話で僕が印象に残っているのは、こういう魅力的な展覧会、展示の仕方はこれからどんどんやっていかななくてはいけないと奥村先生がおっしゃった言葉で、その通りだと思います。それには、まず藝大の中を考えなければいけない。簡単に言えば作家と教育者が分離した日本の美術教育の歴史があって、藝大は今、作家養成だというように語られ続けてきたわけです。でも、もともとは美術教育も含んだ学校なのです。いつのまにか美術教育が乖離してしまった、という歴史の延長線上に今があるような気がします。藝大が作家養成の大学だと思われているようでは、この先の展開は難しい。積極的にもっと社会の中で教育を真剣に考えていく姿勢を示していくことが大事だと思います。藝大130周年でこの企画が中村先生の方で取り組まれています。実は120周年でも同じような企画に取り組んでいました。各小中高それぞれの美術教育の授業日数の削減傾向の問題、教員の配置の問題など、複雑な問題は今もあります。それに対して国や世論に向かって、どう発信していくかが、実はなかなか難しい。そういう時にこそ、藝大はきちっとした発信をできるように、常に教育に対する姿勢が真摯で、社会、先生方そして子供達に信頼される大学になって行かなくてはならないと思います。それを発信すれば、やっぱり人はついてきてくれます。だから「藝大さん楽しいことやってますね。」だけで終わるような一過性の企画になってはいけません。藝大側の姿勢が今大事になっています。この企画が継続するためには、ここに今日出席していただいている先生方々を含め、もっ

と多くの学内でも学外でも人が繋がれる場をどうやって作ってゆくのかにかかっていると思います。それが、小中高大、そして社会や先ほどあったデザインの話、または社会教育、学校教育などすべてにしっかり繋がっていくのだと思います。だから、藝大がそうした発信するのならば、藝大は本気で構えないといけない。これからの計画をしっかり取り組んでいけるような大学になったらいいなと思っています。

中村：この企画をしながら、藝大だけの問題ではなくて、全国の美術系大学それに準じた機関、関係者がより多くの議論、対話を生み出していく必要があるなと改めて思っています。作品が並ぶと、作品が持っている力が人の何か言葉にしにくい部分を語ってくれる、その力を今回展覧会を作ることで感じました。作品を作る人たち、鑑賞すること、そして美術の力が今後社会に対してどのように生きる力を持つべきかというお話をみなさんから伺うことができました。今日の話の中では前々から、中央教育審議会の中では言ったことがやっと表にでてきたんだよと、逆に言えば、美術の考えの方が先を行っていたとも感じました。今日、僕ら大学側もそうですが、先程の OJUN さんの椅子の話の思い出すと、ここにいない方等の思いをどのように受け止めるかの準備をしていかなければならないと改めて感じました。是非、今後もこうした議論を続けていけたらと思います。今日は長い時間ありがとうございました。

